



玄関車寄せ

蘇山荘は1937年(昭和12年)に名古屋市が主催した名古屋汎太平洋平和博覧会の迎賓館和館である。歴史に埋もれた博覧会であるが、満州事変から第二次世界大戦前の軍備増強時代に、人口100万人を突破、東洋一のまちづくりを進めていた大名古屋が「平和」をテーマに開催した日本初の国際博覧会である。陸・海・空の国際的な新しい玄関となった名古屋港から江戸時代の埋立て地である熱田前新田の一角を会場とし、近くには名古屋城築城時に整備された白鳥水中貯木場があり、木曾や飛騨から伐り出された木材が貯蔵されていた。蘇山荘は博覧会中は「檜荘」と呼ばれ、国内外の賓客をもてなす国際交流の場として、木材産業発祥の地として良質な木曽材を展示紹介する場としての役割を果たした。博覧会閉会後は徳川園に移築され、平和博覧会を今に伝える唯一の建築物となっている。



登録有形文化財建造物(国)としての登録理由は、伝統的な和風建築様式をとりながらも、中廊下や階高の高い座敷を採用する「近代和風建築」の好例として、他の造形の模範となっていることとされている。

見どころ

これまでの生活文化を引き継ぎながらも、現代の多様な価値観、ライフスタイル、ワークスタイルをおおらかに受け入れ、違和感なく美しい空間づくりを実現するためには、蘇山荘のような「近代和風建築」が参考になるのではないかということを実感できる。運営者による夜の空間演出も魅力的であり大変参考にできる。



玄関構え、玄関破風の懸魚、床飾り、付書院、襖などの従来の和室の手法と、ガラス戸の採用、中廊下の設定、洋家具を意識した階高の高い座敷や応接間などが事に調和し、また、主要材料を木曽檜とし、柱には割れにくい芯去材や表面に節の無い無地材という高級材を採用しているにもかかわらず、大変奥床しく、現代の流通家具とも違和感なく調和しており、まさに「和」の空間となっている。広い廊下、庭との関係性、季節ごとの設え、手入れの艶、格調高さなど、人生を豊かに生きるために五感・感性を鍛えられる失いたくないものばかりである。



木造平屋建て、棧瓦葺きの入母屋造と一部寄棟造、コの字型の平面構成でかつての車寄せが突出しており、玄関から広間へは広い廊下が廻っている。現在は喫茶室として使用されているため、かつてとは異なる使用方法の部屋もあるが、部屋の形状は当初のままを維持されている。



建物名称	蘇山荘 / ガーデンレストラン徳川園
建築年	1937年(昭和12年) 同年移築
構造・様式	木造平屋建て・近代和風建築
所在地	名古屋市東区徳川町1001
電話	052-932-7887
H P	http://www.sozanso-tokugawa.jp/
開館時間	火～金10:00～17:00(喫茶) 19:00～23:30(バー)
アクセス	地下鉄名城線・JR中央本線大曾根駅 徒歩10分
備考	国登録有形文化財 駐車場あり(有料)



爲春亭

爲三郎記念館は、一代で名古屋を代表する実業家となり、後に文化芸術、福祉、教育、医療の分野で社会に多大な貢献をした古川爲三郎が、長年に渡り暮らした数寄屋造りの邸宅である。建物全体に数寄の世界が行き渡り、茶人好みの建築といえよう。敷地は閑静な住宅街にあり、樹木の繁る敷地内には主屋の「爲春亭」、四季折々に変化を見せる日本庭園、その中にひっそりとたたずむ茶室「知足庵」があり、北垂れの敷地の地形を巧みに活かし、建物と庭が配置されている。



知足庵

見どころ

爲三郎記念館には小間・広間の変化に富んだ五つの茶の空間があり、其々の席を使い分け様々な茶事が行われていたと思われる。部屋ごとに意匠に趣向が凝らされているが、これみよがしの感がない。庭と和室を繋ぐ縁側の曖昧で豊かな空間が、居心地の良さにつながっている。また、和の空間の意匠に大きく係わる欄間や建具の意匠と機能性は必見である。見学の際は、一廻り目はまず全体の雰囲気を感じる。二廻り目は床の間、欄間や建具、天井などの細部を観察。三廻り目は茶事を想定して、庭、縁側、和室の空間構成を観察。最後は座してゆっくりと空間を堪能することをお奨めしたい。

【爲春亭（いしゅんてい）】

爲春亭は各部屋が雁行して並び、柱と貫が交差する高床式の外観は、桂離宮の書院建築を彷彿させる。「ひさごの間」「大桐の間」「葵の間」「太郎庵」があり、それぞれ趣向を凝らした意匠が見られる。「ひさごの間」は、その名が襖に漆で型押しされた瓢箪の模様由来し、床脇の琵琶床は出書院風で、源氏香紋の透かし彫りの欄間、円窓の下地窓や木瓜形（もっこうがた）の無双窓など桂離宮の意匠が見られる。「大桐の間」は杉と桐の木目を活かし山の重なりを表現した連山薄肉彫欄間と、山にかかる雲をイメージした障子欄間の意匠の掛け合いが印象的である。「葵の間」は四畳半の茶室で知足庵の反転と言え、市松の網代と竿縁天井を組合せた折上げ天井が特徴的である。

【知足庵（ちそくあん）】

「足ることを知る」という利休の教えからその名をとった知足庵。織田有楽斎が建てた「如庵」の写しの茶室である。二畳半台目向切で下座床の席は床脇に鱗板を入れて壁面を斜行させ、点前座正面の炉の前角に中柱を立てて、火灯形をくり抜いた板を嵌める如庵独特の構成を踏襲しているが、その他は知足庵ならではの部分が多くみられる。



大桐の間



ひさごの間

建物名称	古川美術館分館 爲三郎記念館
建築年	1934年(昭和9年)
構造・様式	木造平屋建て・数寄屋造り
所在地	名古屋市千種区池下2丁目50番地
電話	052-763-1991
H P	http://www.furukawa-museum.or.jp/
開館時間	10:00~17:00 (月曜休館)
アクセス	市営地下鉄東山線池下駅徒歩3分 駐車場有
備考	国登録有形文化財・名古屋市認定地域建造物資産



捻駕籠の席

名古屋の閑静な住宅地に建つ南山寿荘は、実業家であった後藤幸三氏の住宅であった建物であり、元々は、堀川沿いに建てられていた尾張藩家老の渡辺規綱の別邸だった茶室と書院からなる建物である。規綱は裏千家の家元玄々斎の実兄であり、自らも又日庵（ゆうじつあん）と号す茶人であったと知られている。江戸末期に建てられ、昭和10年に現在の地へ後藤家の別邸として移築された。

一階の茶室は、主屋に対し角度を振って配置されていることから、捻駕籠（ねじかご）の席と名づけられた。移築前は、堀川から寄付を経て、階段を上って内腰掛に入った。二階書院は入舟の席とも呼ばれていた。現在も池からの傾斜を利用した配置は当時のたたずまいが感じられる。

移築後に変わった部分もあるが、この変わった部分を見ると、後藤氏や関わった大工のセンスの良さが感じられる。玄関は元々台所であった場所であるが、高山の古民家より材を移築し、民芸調の応接間となっている。どっしりとしたその空間は、武家好みの茶室、明るく開放的な広間と対照的で、建物全体の印象をより鮮やかにしている。また、二階の水屋の天袋の板戸も木目を活かした山の意匠が粋である。

見どころ

玄関入ってすぐの民芸調の応接間、その向こうから外の緑が目に入ってくる。廊下へ進むと、その右側の壁には下端が膝の高さの開口があり、中に斜めの壁が見える。とても魅力的な空間で、その開口（中潜り）を通して、内腰掛に入る。その台形の空間は何とも居心地がいい。それらを経て入る捻駕籠の席は、それまでの期待を裏切らないお茶室である。

捻駕籠の席は、四畳中板入りで、座によって天井の高さや材を変えたり、筆柱を配したりと空間に変化と広がりを感じられる。障子には外の緑の色が映りこみ、季節の変化も楽しめる。



昭和美術館の展示室には、数寄者であった後藤氏が集めた茶道具や和歌などのコレクションが企画に合わせて展示されている。また、敷地内にある南山寿荘旧正門は、芝居小屋から移築され、移築後に捻駕籠の席にちなみ、門扉がその屋根に対して斜めに取り付けられたもの、内腰掛待合は桂離宮の写しであり、有合庵の小間は普段非公開だが、極小の空間が素晴らしい。展示室を見て、これらの建物を眺めながら静かな庭をめぐり、南山寿荘を観ると、名古屋のお茶文化を感じることができる。



二階の広間は、洗練された武家の書院といった趣きで、すっきりとした主張しすぎない意匠が素敵である。障子は正方形に棧が組まれ、下の方は横棧の間隔が狭くなっている。玄々斎好みだそうで、かっこいい。ふすまの引手は裏千家の替え紋であるつぼつぼのデザインになっている。つぼつぼの引手は捻駕籠の席の水屋にもみられる。



建物名称	南山寿荘(旧渡辺家書院及び茶室)/昭和美術館
建築年	1832年(天保3年)建築、昭和10年移築
構造・様式	木造二階建て・数寄屋造り
所在地	名古屋市昭和区汐見町4番地の1
電話	052-832-5851
H P	http://www.spice.or.jp/~shouwa-museum
開館時間	10:00~16:30(月・火定休)展示開催中のみ開館 南山寿荘内部は11月3日公開、捻駕籠の席は予約制
アクセス	市営地下鉄鶴舞線いりなか駅徒歩10分 駐車場有
備考	愛知県指定文化財



今現在も和田家の住居で有り、一部が一般公開されている

世界文化遺産である白川村荻町集落が一望できるという城山から一番手前に位置しているのが和田家である。

白川村に現存する合掌造り家屋の中では、最大の規模をもち、主屋は国・県重要文化財、板蔵・稲架小屋は県重要文化財に指定されている。

和田家の建築年代は明らかではないが、同家の過去帳の記録などにより、約300年は経ていると推測されている。

重厚な造り黒光りする太い柱などは、代々名主を勤め、牛首口留番所役人も勤めていたという時代から現在までの和田家が刻み続けている何百年もの生活の歴史を感じずにはいられない。和田家は、古文書や鑑札などの遺物の記録から番所の役人を勤めながら、煙硝（火薬）や生糸の取り扱いを行っていたことがわかっている。

見どころ



城山展望台からの冬のライトアップ風景

自然豊かな山里で、四季折々の風情のある集落であるが、冬は雪深く、積雪量は毎年2メートルを超え、かつては陸の孤島となっていた。

しかし現在では合掌造りライトアップなど、冬ならではの魅力も楽しめるようになっている。



2階は代々使用されてきた民具の展示スペース



梁組は建築当時のままであるが、茅葺は更新され続け縄の結び方など技術の継承が見られる



静かな雪夜のたたずまい

建物名称	和田家住宅
建築年	18世紀初頭
構造・様式	木造3層構造、合掌造、茅葺屋根
所在地	岐阜県大野郡白川村荻町
電話	05769-6-1058
H P	http://shirakawa-go.org/kankou/guide/174/
開館時間	9:00~17:00(不定休)
アクセス	東海北陸自動車道白川郷ICより駐車場5分、徒歩5分
備考	国指定重要文化財・岐阜県指定文化財



高山祭の屋台組が残るしもまちの古い町並みの通りに面している

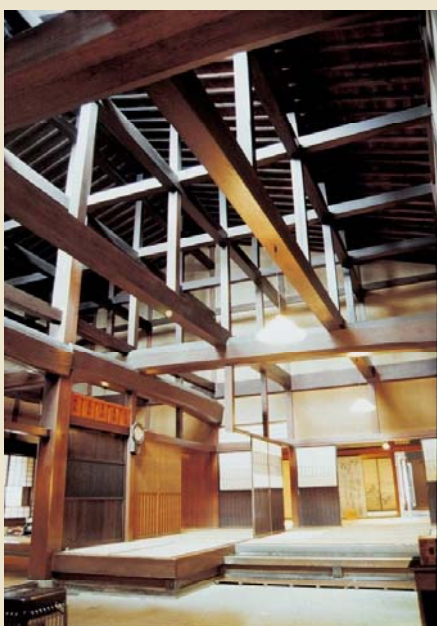
明治40年に建築されたもので、国の重要文化財に指定されている。日下部家が男性的な建物に対し、この吉島家は建物のすみずみまで神経のゆきとどいた、繊細さと女性的な美しさのある建物といわれている。

明治8年の大火で焼失し、再建されたが、30年も経たないうちに、明治38年また焼失した。

吉島家は天明8年（1784）に、初代重兵衛が高山に居住したのがはじまりで、代々酒造業を営んできた家であり、酒神を祭る三輪神社の杉玉を軒先に下げている。江戸後期頃から生糸繭の売買などで栄えた。

見どころ

大黒柱を中心に、梁（横にかける材）と束（梁に垂直の短い柱）によって構成される吹き抜けは、高窓からの光線をたくみに屋内に取り入れ、柱や鏡戸の木目を美しく見せている。



民家らしい象徴的な梁組



明治40年川原町の名工西田伊三郎（ニシダ・イサブロウ）により建てられ、昔の造り酒屋の面影を伝える華やかな商家である。

土間の吹き抜け部分で、大黒柱を中心として構成される梁組と高窓から差し込む光がもたらす陰影に注目したい。昭和52年米国の建築界の巨匠チャールズ・ムーアが「自分が見たうちでは最高の日本建築である」と激賞した。



どうじ、おえの広い空間



みせ2階のモダンなしつらい



端正な2階座敷



通り路地より玄関を見る

建物名称	吉島家住宅
建築年	18世紀初頭
構造・様式	木造2階建、切妻造
所在地	岐阜県高山市新町1-58
電話	0577-32-0038
H P	http://kankou.city.takayama.lg.jp/2000002/2000026/2000208.htm
開館時間	9:00~17:00（年末年始、冬季の火曜日）
アクセス	JR高山駅より徒歩15分
備考	国指定重要文化財



外観：式台玄関付近

岡田家（通称北岡田家）は、江戸時代には大垣藩の庄屋等を努め、広大な農地を有した地元の名士である。現在の屋敷は、明治期の2度の災害で被災した後、5代目当主が30年の歳月を費やして完成させた。広大な敷地に、表門、裏門を構え、主屋、離れ、米藏、納屋などが並び、庭園の池には滝がある。

主屋は、大正6年創建。手を尽くして集めた最高の資材を用い、名匠と知られる職人に造作させた、当地における近代和風建築の意匠・技術の到達点を示すものである。特筆すべきは保存状態の良さである。近世・近代の地主層の屋敷は、戦後の農地解放により人手に渡って改変されたり、傷んだまま放置されている建物や、高度経済成長期に取り壊された建物も多く、当時のまま良好に保存されていることは貴重である。平成24年8月に主屋が国の登録有形文化財に登録された。

見どころ

<主屋>

屋根切妻造瓦葺2階建 正面右寄りに入母屋造り瓦葺きの客用玄関「式台玄関」がある。大小17の部屋を有し、規模が格段に大きい。「仏壇の間」の折上小屋組格天井のように 最高の造作が行われている。15畳の「座敷」 付け書院にもうけられた庭園を望む大きな窓や、採光に配慮した多くの天窓、棟の東西に設置された雷針等時代を反映した意匠も随所にみられる。このほか、式台玄関の右手「表口」に当時のまま遺されている両開戸、押上げ式大戸なども貴重である。



意匠を凝らした釘隠し（こうもり、鶴）



欄間



座敷 床脇地袋の小襖



埋込金庫



中の中から座敷を見る



座敷 書院方向



奥の間 棚

建物名称	北岡田家
建築年	1917年（大正6年）
構造・様式	木造2階建て・農村邸宅
所在地	岐阜県揖斐郡大野町相羽字村通282
電話	0585-34-1111（大野町教育委員会生涯学習課）
H P	http://www.town-ono.jp/000000494.html
開館時間	一般公開は春と秋の期間限定(要問合せ)
アクセス	名神高速道路大垣インターから30分
備考	国登録有形文化財



母屋正面玄関

昭和10年に建てられ、戦火や伊勢湾台風をくぐり抜けてきた個人の店舗兼住宅である。父から受け継いだ現在の持ち主の思いのもとにリノベーションが行われ、空き家になることを免れた。以前の持ち主と親交のあった津市の実業家でもあり作陶家の川喜田半泥子が、当時庭にあった3本の松にちなんで、「三松荘」という名前を与えたとの云われが残っている。今回の工事で、失われていた松1本を植え足し3本の松を復活させた。槇、苔、寒椿など常緑の落ち着きある庭に新たに紅葉や備長炭を配して彩りを添え、母屋の座敷から眺める和の庭には3本の松が昔からそこにあったかのような景色となった。また、洋館横のガレージを取り壊した場所に石畳のテラスを設けることで街に開かれた場となっている。テラスに植えられた泰山木が大きな白い花を咲かせる頃、「三松荘」に人が集うことを楽しみに思う。

見どころ

何代かの持ち主の手に渡り姿を変えてきた建築が、三重県の伝統工芸品や伝統工芸士の手によって新たによみがえった。座敷の表具は「伊勢木綿」、照明器具には「伊勢型紙」をあしらい、床の間は「伊賀白土磨き」小面は「黒漆喰磨き」と三重産の土を使った壁となっている。障子の組子も美しく修復され、建築当時の姿を取り戻した。また、玄関襖の唐紙は三松荘のオリジナル柄「松菱」を版木から制作した。その松菱柄で地元の藍染師によって暖簾も制作された。押入から洗面室へと変わった空間に設置された左官職人による人造研ぎ出しの洗面台も見どころの一つである。和の庭に鎮座する橐型の大きな手水鉢もぜひ見ていただきたい。



和の庭



石畳のテラス

【三松荘の構成】母屋、洋館、ギャラリー(旧倉庫)、蔵、離れ
入母屋屋根の玄関を入り、前座敷6畳、中の間4畳、奥座敷10畳からなる母屋がメインのスペースで、奥座敷の床の間には書院、琵琶台が設けられている。中廊下を挟んで居間として使われていた場所は天井を取り払い小屋組を露わにガラス瓦から自然光の差し込むホールへと変わった。



母屋座敷



ホール

母屋玄関の南側に位置する洋館は岩田川に面した木製建具の窓からたっぷりと光が差し込む。漆喰に塗り替えられた壁は音響が良く、演奏会などにも利用されている。北側に位置する質屋を営んでいた頃の倉庫はギャラリーへと様変わりした。



洋館



ギャラリー



写真提供 アトリエ・ワン

建物名称	三松荘（個人宅）
建築年	1935年（昭和10年）築 2017年（平成29年）リノベーション 設計：アトリエ・ワン
構造・様式	木造平屋建て 木造3階建て 鉄骨造2階建て 蔵
所在地	三重県津市丸之内3丁目22
電話	非公開
H P	なし
アクセス	近鉄名古屋線津新町駅下車 徒歩10分
備考	個人宅ですがご連絡の上、見学可能です 連絡先：4directions.gsl.etc@gmail.com



玄関棟（大玄関）

旧崇広堂は伊勢津藩第10代藩主の藤堂高兌（たかさわ）が子弟を教育するため、津の藩校・有造館の支校として建てられたものである。場所は伊賀上野城の南西に位置し、明治維新後も私立上野義学校、村立上野学校、町立丸之内尋常小学校など、その都度名称を改めてきた。明治38年からは図書館として昭和58年まで使用されていた。現在は補修工事などを経て、様々な文化啓発活動の場として、また赤門の愛称で市民に親しまれている。講堂は文政4年（1821年）創建当時の姿のまま今に残し、現存している藩校としては近畿・東海地方においてはここしか見る事はできないとされている。昭和5年に国の史跡に指定されている。

見どころ

藩主が出入りする門「御成門」と「小玄関（御成玄関）」一般の出入り口「表門（赤門）」と大勢が一度に利用できる「大玄関」。表門から「大玄関」までは石畳が敷かれている。このふたつの玄関には式台があるのに対して、左手（西側）の下玄関は土間である。さらに西には勝手口があり台所へ直接入る。このように門と玄関の配置と構えによって空間が区別されている。下玄関を入ると敷かれている畳は縁のない「坊主畳」、天井は竹小舞天井となっている。一方「大玄関」「小玄関」から入ると縁のある畳が敷かれ、棹縁天井である。内装についても空間によって区別されている。いわば《空間のヒエラルキー》。ここには封建時代の建築の考え方を読み取れるのかも知れない。



講堂：外観



表門（赤門）



講堂：内観

【講堂】

文政4年の棟札があり、創建当初の建物である。間口7間、奥行7間、入母屋の大空間となっている。中央は列柱に囲まれた28枚の畳が敷かれた高天井の空間があり、その外を一間幅の畳縁が廻る。更にその外縁を半間の板敷きの廻縁が囲む。大空間の講堂は三段階に構成され、外縁から中央へ向かって求心性を高めている。



御成門



小玄関（御成玄関）

建物名称	旧崇広堂
建築年	1821年（文政4年）
構造・様式	木造平屋建て 入母屋 瓦葺
所在地	三重県伊賀市上野丸之内78番地の1
電話	0595-24-6090
H P	http://www.bunto.com/?p=411
開館時間	9：00～16：30（火曜休館）
アクセス	伊賀鉄道伊賀線上野丸之内駅徒歩5分（駐車場なし）
備考	国指定史跡旧崇広堂

旧長谷川家住宅

三重県松阪市

きゅうはせがわけじゅうたく



正面玄関

長谷川家は数多い江戸店持ち商人の中でもいち早く江戸へ進出し成功をおさめ、「丹波屋」を屋号とする松阪屈指の豪商、長谷川治郎兵衛家の本宅である。江戸時代の浮世絵師、歌川広重作の「東都大伝馬街繁栄之図」には長谷川家の江戸店が描かれており、当時、江戸の大伝馬町一丁目に5軒の出店を構える木綿商で、その繁栄ぶりがうかがえる。長谷川家の広大な屋敷構えは、その長い歴史の中で隣接地の買収と増築を繰り返して形成されたもので、近世から近代にかけて商家建築の変遷をたどることができる。正面外観は建ちの低い厨子2階建て、切妻造、平入りの町家で両袖にはうだつが上がる。左手に表蔵を見ながら玄関をくぐると奥に向かって通り土間が続き、奥に土蔵が更に4棟、最も古い大蔵、左に米蔵、大蔵の右手に新蔵と西蔵が並ぶ。平成28年7月25日に国の重要文化財（建造物）に指定された。

見どころ

土蔵の裏手には町境でもある背割排水が流れ、その奥には池を中心とした回遊式庭園が広がる。ここは以前、紀州藩勢州奉行所があった地で明治初年に長谷川家が購入し、庭園の他に離れや茶室、四阿なども建てられた。他の建物とは逸して、この離れだけが南西の方角を向いているのは、松坂城を望むためだったと考えられる。今は高層の建物の影となっているが、この庭園越しに松坂城を眺めた豪商家の瀟洒な佇まいを感じていただきたい。



うだつ



主屋（通り土間）

長谷川家の広大な屋敷構えは往時の江戸店持ち商人の隆盛を今に伝える。奇抜な意匠や華美な装飾はみられないが、重厚な構え、良材を用いた上質な造りである。質素・儉約を創業以来の家訓としてきた同家の家風をよくあらわしているといえる。



大正座敷（広間）



大正座敷（外観）



建物名称	旧長谷川家住宅
建築年	江戸時代中期～
構造・様式	木造厨子2階建て 切妻造 平入り 土蔵 他
所在地	三重県松阪市魚町1653番地
電話	0598-53-4393（松阪市文化課）
H P	https://www.city.matsusaka.mie.jp/site/kanko/kyuhasegawatei.html
開館時間	フリー公開10：00～16：00（土・日、祝日） 団体公開（予約制・ガイド付）3回/日（月・金）
アクセス	伊勢自動車道松阪インター下車10分 近鉄松阪駅より徒歩10分
備考	国指定重要文化財・三重県指定史跡及び名勝



正面玄関

賓日館は明治20年伊勢神宮に参拝する賓客の休憩・宿泊所として建設された。明治天皇の母、英照皇太后の宿泊に間に合うよう明治19年12月着工、翌年2月に竣工。これほどの短期間で格調高い建物が完成したのは驚異ともいえる。歴代諸皇族、各界要人が数多く宿泊された建物である。明治44年に隣接する二見館の別館となり以降、2度の大増改築を重ねている。重厚な唐破風の玄関や壮麗な大広間など現在の賓日館は昭和5年の改築によるもの。二見館の休業後、平成15年に二見町へ寄贈された。賓日館は建物・庭園も含めて当時一流の建築家による品格のある洗練されたデザイン、選び抜かれた材料やそれに答える職人たちの技など日本の伝統技術の粋を目の当たりにすることが出来る。明治から大正、昭和、平成へと二見町の近代史を語り伝える国指定重要文化財である。

見どころ

賓日館玄関の柱で節があるのは唐破風屋根を支える2本のみである。虹梁は中央部から振分けの返し桱になっており非常に珍しい。上り框は檜、式台は樺の一枚板。天井板は屋久杉の一枚板で釘を使わずに設えてあるので今もひび割れ1つない。玄関周りの材には統一感があるように目線から遠く高い場所にある木は粗い木目に、目線に近く低い位置にある木は細かい木目になっている。玄関すぐ右手の階段親柱には地元の彫刻家・板倉白龍作の「二見かえる」が彫られているが、この蛙は親柱と同じ原木で彫られていて後で取り付けたものではない。この親柱裏側にある「昭和11年初秋」の刻銘を実際に見ていただきたい。



【大広間】

大広間

120畳敷きの大広間は代表的書院造りで、桃山式の折上格天井にはシャンデリアが施され和洋折衷の妙も見ごたえがある。床の間、違い棚廊下には最高級の国産材が使われており、舞台は能舞台として数々の音響上の配慮がされている。背景の「老松」は、郷土の日本画家・中村左洲の作である。昭和5年の大増改築で設計管理を務めたのは前年の式年遷宮で主任技師だった建築家・大江新太郎と塩野庄四郎の二人である。

【御殿の間】

御殿の間の天井は珍しい二重格天井になっており、一層の格式を尊ぶ形式となっている。床の間の床框は見事な螺鈿の輪島塗。欄間は細い格子の箴欄間で、広縁の天井は屋久杉が用いられている。広縁南側の化粧室の天井には見事な寄木造りになっており、創建時の姿を残している。



御殿の間



建物名称	賓日館
建築年	1887年(明治20年)
構造・様式	木造2階建て 瓦葺
所在地	三重県伊勢市二見町茶屋566-2
電話	0596-43-2003
H P	http://hinjitsukan.com/
開館時間	9:00~17:00(最終入館16:30) 火曜休館
アクセス	伊勢二見鳥羽ラインJCTより車で4分、駐車場有 JR二見駅より徒歩12分
備考	国指定重要文化財



式台と切妻面のアズマダチが見える

越中の豪農であった内山家の邸宅・庭園等を、1977年(昭和52年)8月に13代内山季友(すえとも)氏から富山県へ譲渡され、現在は富山県民会館分館として利用されている。

内山家は、内山昌峰(まさみね)氏が1521～1531年(大永・享禄)の頃に宮尾を新田開発し、そこから季友氏(1888～1981)まで13代続いた家柄である。富山藩の時代には十村(とむら)役として、勸農・治水にあっていた。明治期以降は地主制度の元で最大の繁栄を迎え多くの文人や政治家も訪れていた。

この建物の大部分は、11代内山年彦(としひこ)氏が1868年(慶応4年)に建てたものである。

屋根は棧瓦葺(当初は板葺石置き屋根)で、正面は化粧梁と束を格子状に組み、切妻面を見せる「アズマダチ」で、正面左側に入母屋造妻入りの式台を有する。

平面は、式台左側に六間の長細い土間を有し、式台の奥には二間続きの広間、その右側には表座敷、台子の間、その右側に外川の間と呼ばれる書院を配している。

明治20年代に、12代内山外川(がいせん)氏により外川の間の奥に書院、茶室、水屋が増築された。この一郭もまた選び抜かれた材料で造られ、千石地主の繁栄がしのばれる。

明治40年代には主屋背後に連なる居住部分が改築された。



表座敷（透彫の欄間）



増築された書院

見どころ



正面の薬医門

内山邸に到着すると、正面には薬医門が現れる。薬医門の両側は塀と土居に建仁寺垣風の垣根がめぐらされているが、その手前の用水には菖蒲や燕子花が植えられている。見上げると、大木が敷地を囲み、いかにも富山らしい屋敷林となっている。



復元された柳原文庫

広大な敷地に入ると、主屋以外にも蔵や作業所、茶室等がある。まずは建物外観を拝見しつつ、庭を見て頂きたい。梅園、種々の桜、竹林が広がる敷地には四季折々の花が咲く。貴重な資料が所蔵されていた柳原文庫は、平成27年度に復原され、その姿を目にすることが出来る。



月見台からの庭園の眺め

次に主屋内部へ。まずは一つ一つの部屋の雰囲気を感じ取って頂きたい。その際ぬれ縁から庭園を眺めることも忘れずに。そして再度各部屋を廻り、天井の造りや、広間・式台の竹の節欄間、表座敷の透彫の欄間、各部屋の意匠の異なる釘隠し、緻密で繊細な襖絵や杉戸、様々なデザインの引手や唐紙、書院の棚など個々の造りをご堪能頂きたい。丁寧な造りと上質な材料で出来た空間にもなされることだろう。



三入庵外観



三入庵内観



夜雨廳外観



夜雨廳内観

豪農の館といえど、一般の農家住宅とは趣を異にし、この建物は殿様など階級の高い方をお迎えする、武家屋敷の書院的な性格を持っている。広間や表座敷の木部は漆塗りで仕上げられ、格式高い雰囲気漂う。明治期には、主屋に増築された書院式茶室、竹林に囲まれた三入庵(さんにゆうあん)、蔵横の離れ書院を改装した夜雨廳(やうちよう)の3つの茶室が出来た。

増築された書院床脇の天袋は富山藩の絵師により描かれたものである。書院式茶室と三入庵は藪内流家元の指図、指導を受け建てられており、特に、書院式茶室は、家元本席・燕庵の間取を意識したものとなり、書院式茶室の寄付き待合には持仏堂が設けられ入口は火打型で、枠縁は竹を回し、手の込んだ造作となっている。水屋には北陸では珍しい外部から取水する水張口の付いた水屋棚となっている。

三入庵は藪内家11代透月斎竹窓の好みと伝えられ、前面の深い庇が印象的である。

夜雨廳は、窓が多く明るい造りのため、外部に御簾を設けており、それがリズミカルである。内外部の色壁は、浅縹(青色)と浅緋(赤色)を用い个性的である。



寄付き待合（左：持仏堂）



水屋棚

建物名称	豪農の館 内山邸（富山県民会館分館）
建築年	1868年(慶応4年)
構造・様式	木造平屋建一部二階建棧瓦葺住宅 外
所在地	富山市宮尾903番地
電話	076-432-4567
H P	http://www.bunka-toyama.jp/uchiyama/index.php
開館時間	9：30～17：00
アクセス	富山駅から車で約10分
備考	国登録有形文化財 *撮影：大釜恵

茶室円山庵 立礼席

ちやしつえんざんあん りゅうれいせき

富山県富山市

富山市民俗民芸村内にある茶室円山庵は、富山の茶人・金子宗峰が大正9年に建築した茶室「録寿庵」を、戦後当地に移築したものである。昭和55年（1980年）に富山市民俗民芸村の附属施設として増改築され、翌年「円山庵」として開館した。「立礼席」は一般に開放され、呉羽丘陵の豊かな自然の中で気軽にお茶を楽しめる施設として、富山市民の憩いの場となっている。



アプローチ（緑のトンネルと石畳の露地）



立礼席入口

「立礼席（りゅうれいせき）」とは、椅子に座って（正座をせずに）、お茶をいただける茶席のことである。こじんまりとしたヒューマンスケールの室内は、年月を経て味わいを増した自然素材の仕上げにより、落ち着きが醸しだされている。

見どころ

茶室につながる庭を「露地」と呼ぶ。茶室に向かって歩みを進めるごとに目の前に広がる景色が変化し、日常生活から離れた茶の湯の世界へと心が整えられる。円山庵は、伝統的な露地の形式を踏襲しており、訪れる人々が四季折々の自然を存分に感じとれるような工夫がなされている。

①周辺の景色（呉羽山）



②道に面した露地門



③樹木の中のアプローチ



④中門（内露地の入口）



⑤池泉庭園



⑥立礼席内



←立礼席室内

大きな開口部は、網戸も無しに庭に向かって開け放たれ、自然を直接に感じ取ることが出来る。天井は、三つの意匠に分割され（平天井、掛込天井、落天井）、掛込天井は窓に向かって軒裏に連続している。床は玄昌石貼り、周辺部が豆砂利洗出仕上げとなっており、外部と同じ高さで豆砂利仕上げが連続し、外部空間との繋がりを意匠的にも強めている。和（日本）建築の特徴のひとつである「自然との一体感」を感じられる、半屋外的な茶室空間となっている。

↓庭と一体化した立礼席

「まるで峠の茶屋のよう…」と、散歩やジョギングの途中にフラリと立ち寄りお客さんも多いとのこと。「気軽さ」と「お茶の雰囲気」を両立させている空間である。



なお、民俗民芸村内には、この他に5つの移築された古民家や蔵があり、その中の「陶芸館」として使用されている「アズマダチ」の切妻住宅は、国の登録有形文化財である。（写真左）

建物名称	茶室円山庵 立礼席
建築年	1980年(昭和55年)
構造・様式	木造平屋建・前入母屋・後切妻造
所在地	富山市安養坊 47-3
電話	076-432-4782
H P	http://www.city.toyama.toyama.jp/etc/minzokumingei/
開館時間	9:00~17:00(入室は16:30まで)
アクセス	北陸自動車道・富山IC、富山西ICより車で20分
備考	旧「録寿庵」の内部見学は、不可



菅野家全景

【山町筋の歴史】

富山県高岡市にある「山町筋」と「金屋町」は、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。山町筋の歴史は400年余前まで遡り、加賀藩第三代藩主の前田利常が城下町から商工業の町へと転換し、商人のまちとして発展した。



山町筋のまちなみ

見どころ

【和室と中庭をつなぐ縁】

ブツマやホンマに佇み空間を堪能した後、ホンマから中庭を眺めてみると、和室・縁・四季を感じる中庭のつながりに空間の奥行きや深みを感じることができる。また、岡山の土とメノオの粉を混ぜたベンガラの壁は色褪せず、障子の白とのコントラストがとても美しい。



【灯具や金具】

ブツマとホンマには天井から灯具が吊り下げられている。対となっている灯具は、シンプルでレトロな雰囲気を醸し出している。さらに、和室を囲む長押に取り付けられた小さな釘隠しを目することができる。長寿の実を模ったそうで主張はせずとも目を惹く装飾となっている。



灯具



釘隠し



引手

【格子や塀】

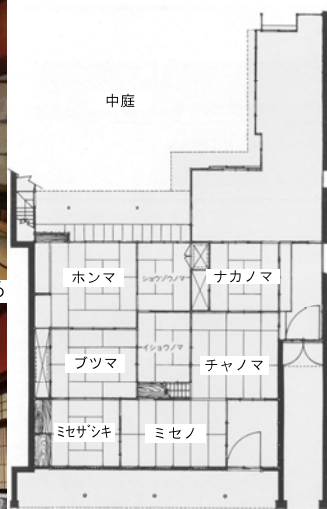
外部と内部をつなぐ下屋空間に設置された格子は、外からは見えにくく、逆に室内からは外の様子が良く見える、内と外を繋ぐ装置。また、敷地境界にある塀は、壁面にデザインされた記号を模ったスリットが、圧迫感を無くし道行く人に心地良さを演出している。



ブツマから中庭を見る



床の間（ホンマ）



主屋 1階平面図※

※ 富山県高岡市教育委員会発行「重要文化財 菅野家住宅」より

【外観・内観】

菅野家は、大きな箱棟や黒漆喰の外壁、観音開きの防火扉、煉瓦の防火壁や石柱など、重厚な外観である。内部は、重厚な外観の雰囲気とは対照的で、柱や長押の部材が細く、繊細な雰囲気を醸し出している。ホンマの柱は檜、天井は屋久杉といった銘木を使用している。

建物名称	菅野家住宅
建築年	1902年（明治35年）
構造・様式	木造2階建て 土蔵造り
所在地	富山県高岡市木舟町36番1号
電話	0766-22-3078
H P	http://www.takagas.co.jp/suganoke/
開館時間	3月～12月：9時30分～16時（火曜休館） 1月～2月：休館
アクセス	高岡駅より徒歩15分
備考	国指定重要文化財



明治の館（旧室木家住宅）は、廻船業や酒造業などで成功し、この地区の大地主に成長した室木彌八郎が明治12年（1879）から建築にとりかかり、明治19年（1886）に完成させた合掌組入母屋造りの家である。家の規模は敷地面積4,143㎡、主屋のほか、台所・納屋、道具蔵、米蔵、表納屋、と4つの付属室がつき、正面に門と塀を配し、建坪は総合計で852㎡（258坪）ある。



【座敷】

上、中、下と三室が並ぶ格式のある座敷である。上座敷は黒柿と黒壇の床の間に付書院、露板の施された正式な造り。下座敷は略式で、床脇に中国風の半円形障子が入っている。

見どころ

【梁と用材】
太く大きな梁の四丁組。曲がった大木をがっしり組み合わせた技法に豪邸の風格が感じられる。



柱、平物、縁板、建具等全て樺材を使って豪華に仕上げられている。戸は樺の一枚板で直径2mの幹周り6m以上の大木を使用している。

【囲炉裏】

アテ材を使用し、入り方式の形式となっている囲炉裏で



ある。薪が焚かれ、その煙と乾いた空気が合掌組の屋根裏へ昇り茅葺屋根を保護している。



【佛間】

式台から入ると、その奥は格天井の佛間。佛間の襖は、上部がゆるやかな曲線をもたせた凝った造りである。真直な材を曲げるのではなく広い材から曲面を型取って造ったものである。



【米蔵】

この蔵は平成19年の能登半島地震で大きな被害を受けたが、平成22年に修復工事を行い民俗資料展示室として、収集した民俗資料の展示を行っている。



【庭園】

主屋の西側にある庭は座敷から眺めることができる南北に長い池泉回遊式の庭園である。池は羽を広げた鶴を形取り、亀の頭のような石がせり出して背に当たる部分に木が植栽されていて、鶴亀の泉水と呼ばれている。



建物名称	明治の館
建築年	1886年（明治19年）
構造・様式	木造2階建 合掌組入母屋造り 茅葺屋根
所在地	石川県七尾市中島町外ナ部1番地
電話	0767-66-0175
H P	http://www.city.nanao.lg.jp/
開館時間	午前9:00～午後5:00（入館は午後4:30迄）
アクセス	のと鉄道西岸駅より徒歩10分
備考	七尾市指定文化財 写真：七尾市教育委員会提供



【野村家の由来】

天正十一年（1583）前田利家が金沢城に入城した際、直臣として従った野村伝兵衛貞家は、禄高千石、千二百石と累進し、十一代にわたって御馬廻組頭、各奉行職を歴任。千有余坪の屋敷を拝して連綿と明治四年の廃藩まで続いた由緒深い家柄である。



【濡れ縁と庭園】

長町武家屋敷跡界隈は中級武士が住んでいた、土堀と水の町。現在も藩政時代の面影をしのばせる。雪から土堀を守るための「こも」（ワラを編んだむしろのこと）は金沢の風物詩である。金沢城普請の際に木材の運搬に使われた金沢最古の大野用水が流れ、当野村家などの屋敷はこの水の流れを庭園に引き入れ曲水としている。濡れ縁にせまる曲水、落水が奥行のある空間を形成している。庭園は高低差があり、落水する景色が贅沢な造りであったことを想像させる。室内・廊下・濡れ縁から、視点を変えて立って見るもよし、正座で見るともよし、建物・庭園を立体的に鑑賞できる。

見どころ

日本建築は内外の境があいまいで、室内から庭、玄関へ繋がる演出が魅力的である。縁側が庭と室内をつなげる空間となり、寒い季節は建具が入り室内となり、暑い季節は解放し直射日光を避け、深い庇・屋根が日陰を作り出す。野村家も室内と庭園の繋がりが魅力的な建物である。武家屋敷跡の名残は庭園にある。庭園は1583年に造られたが、建物は加賀大聖寺藩の北前船の傑商久保彦兵衛が1843年に建立したものを移築。元の建物は加賀大聖寺藩の藩主を迎える迎賓館の役割があったため、上段の間がその名残を残す。総檜づくりの格天井や黒柿透かし彫りの釘隠し、鉄刀木の細工彫りでできた襖の引手、ギヤマン入りの障子戸は弘化・嘉永年間の文化の成熟度を物語る。昭和初期の移築の際、庭園と建物を繋いだ大工の腕が素晴らしく違和感を感じない仕上がりである。



上段の間奥より庭園を眺める



謁見の間

上段の間

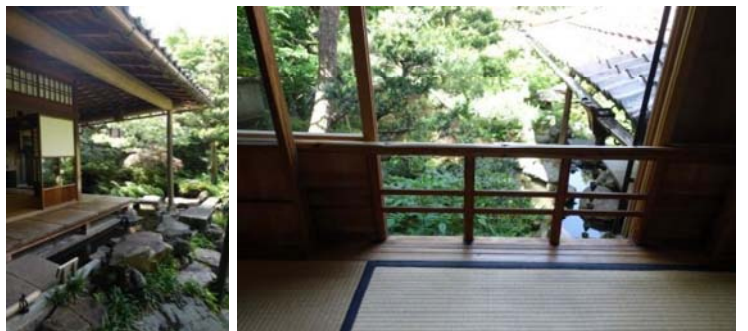
【茶室 不莫庵（ふばくあん）】

天井は桐板に神代杉の一枚板を置き四国特産の数少ないみどり松でおさえた珍しい造りである。控えの間の床板は樹齢約千年の紅葉の一枚板で、天井は真菰（まこも）の茎張りである。2階から眺める庭園を楽しめる。



茶室天井（神代杉）

控えの間



曲水を眺める

不莫庵より庭園を眺める

2009年 フランスミシュランから日本の観光地として2つ星を、またアメリカ庭園専門誌「ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング」誌で2003年日本の庭園ランキング第3位に選ばれた。（1位は足立美術館、2位は桂離宮）

建物名称	武家屋敷跡 野村家
建築年	1843年（天保14年）建造建物を昭和初期移築
構造・様式	木造
所在地	石川県金沢市長町1丁目3番32号
電話	076-221-3553
H P	http://www.nomurake.com
開館時間	8:30~17:30・4~9月 ~16:30・10~3月
アクセス	JR金沢駅よりタクシー10分
備考	駐車場 6台あり



横町うらら館は、旧鶴来町の旧家を一部改装し、街を訪れる人々の休憩所として無料で開放されている。旧鶴来町は、石川・福井・岐阜3県にまたがりそびえる白山の麓、手取川扇状地の扇頂部に位置し、古くは山間部と平野部の交易市場で栄え、金釘宮（きんけんぐう）や白山比咩（しらやまひめ）神社の門前町としても発展した。金沢に交易の中心が移るまでは、この地域の経済・宗教・文化の重要な拠点であった。

横町うらら館の表通りは、白山比咩神社の表参道へと続く通りとなっている。この通りは加賀藩前田家の白山本宮参拝のために整備され、昭和中ごろまでは商家が立ち並ぶにぎやかな通りであった。商家の数は少なくなったが、今でも古くから栄えた鶴来の町の雰囲気を感じることができる。その歴史と立地の中で、横町うらら館は格式ある商家のたたずまいをそのまま残す、貴重な建物となっている。

見どころ



「おえ」の間 *

この建物は天保年間、今からおよそ180年前に建てられた、間口が狭く奥行が長い商家である。間口に対して租税がかかる、江戸時代の町家の特徴をよくあらわしている。敷地面積は170坪程度、建物は間口七間半、奥行き九間の木造2階建て、通り庭でつながった奥に五間×六間の蔵がある。

1階には8室、2階には7室あり、1階の中庭に面した縁側には長さ四間半（約8.2m）の杉証目板が継ぐことなく使われており、奥の座敷は華やかな朱塗りの壁となっている。現在2階は一般に公開されていないが、窓には天保年間に建てられた際に入れられた赤いステンドグラスが、2枚だけ残っているという。凝った造りの神棚や金箔張りの仏壇、一枚板から掘り出した格子欄間など、現在ではなかなか見られなくなった職人技が、細部に光っている。



奥の間。右手奥は仏間

ここは、江戸時代には年貢米を管理する「蔵宿」として、倉庫業と質屋・金貸しなどの金融業をあわせたような商いをしていた。明治期には集配郵便局、昭和期には町医者をしてきたが、平成に入り当主が金沢へ転居する際に、旧鶴来町に寄贈され無料休憩所となった。



「mise」には観光物産が展示してある

道路から玄関を入ると通り庭に面して「mise」の間があり、その奥に「おえ」の間がある。広くはないが囲炉裏が切れ、今も昔も客が気軽に腰を掛けて談笑ができるようなスペースになっている。通り庭を抜けると、「蔵宿」の名残の蔵がある。火災にも強い重厚な石積み壁に囲われており、現在は夏でも涼しいギャラリースペースとして地域で利用されている。



蔵へ続く通り庭。右手は「おえ」

今はさほどではないが、鶴来は雪深い地域であるため、中庭は冬には雪の置場となる。また食用となる季節の野草もあり、中庭は年間通して有効活用されていたようだ。ここには鶴来の暮らしが色濃く残っている。

建物名称	横町うらら館
建築年	1832年（天保3年）
構造・様式	木造2階建、町家（平入り・瓦葺）
所在地	石川県白山市鶴来新町夕1番地
電話	076-272-0001、076-273-5699
H P	http://www.urara-hakusanbito.com
開館時間	10:00～16:00 年中無休（年末年始を除く）
アクセス	電車：北陸鉄道石川線 鶴来駅より徒歩12分 自家用車：白山ICから国道157号線を南へ20分
備考	*写真は、白山市観光連盟提供



見どころ

加賀の山中、湯の町を流れる川の畔にかかるこおろぎ橋から坂を見上げると広大な宅邸の構えが見えてくる。無限庵はこの風景の中に金沢の高岡町から移築された書院である。入母屋造、妻には狐格子に懸魚を付け、四方に棧瓦葺の下屋。随所に豪華な和の美しい意匠が見られるが、四季折々の山の風景と川のせせらぎが背景となった美しい和の空間である。



木瓜型の枠の中に彫刻が施された欄間。2間2枚で左右の構図に埋められ中央に多くの余白を残している。それぞれ枠と一木で一体に彫刻された見事な松板の欄間である。



金唐紙の天袋。天井は神代杉の網代形の寄木張



琵琶台の東は黒柿で摺漆塗、正面の羽目板には優美な蒔絵が施されている。



神代杉の天井板



書院北側の縁



黒柿の手摺

無限庵は、加賀藩元家老横山家の分家、横山章が明治末期に金沢高岡町に建てられた書院をここ山中へ大正元年から大正八年にかけて移築された建築である。武家邸宅書院の伝統を継承する近代の書院造りとして、当時の木造建築技術の粋を傾けた貴重な遺構と言われ、石川県指定文化財として、保存・一般公開されている。



【御殿】

間口4間、奥行4.5間の堂々たる檜（尾州）造りの座敷である。中央に2間の床を、左右に1間の床脇を設け、黒柿の琵琶床、床脇棚の天袋は金唐皮の美しい模様が印象に残る。全面を開放できるように縁を設けた主室は、神代杉の天井板、縁は樺の寄木張、松の一枚堀の欄間等、格式と豪華さの中に、平明な佇まいが凛とした和の空間となっている。また、金沢の書院に見られる群青の壁や黒柿の手摺が配された北側の縁も意匠として美しい。

【縁側の廊下】

座敷の東側の廊下天井は竿縁天井であるが蒲鉾形に起りがつけられている。御殿の縁は樺の菱形獅子吼張である。



【茶室「雄峯庵」】

裏千家四代 仙叟好みの釘箱棚が備え付けられた二畳台目中板入り向切の茶室。同じく横山家より大正時代に移築された。土縁がついた冬季の使用に備えた雪国の工夫が見られる。

建物名称	公益財団法人 前端文化振興財団 無限庵
建築年	明治末期（大正元年移築）
構造・様式	木造2階建 入母屋造、瓦葺
所在地	石川県加賀市山中温泉下谷町口の6
電話	0761-78-0160
H P	http://www.mugenan.com
開館時間	8:30~17:00（年末年始休館）
アクセス	JR加賀温泉駅より山中温泉行きバス下車徒歩20分 JR加賀温泉駅より車で20分
備考	石川県指定文化財・石川県登録博物館



西側外観

養浩館は、福井藩主松平家の別邸で、福井城本丸から北東約400mの位置にあり、城下を流れる芝原上水を引き込んで作られた回遊式林泉庭園「養浩館庭園」の水辺に建つ数寄屋造りの建物である。庭園は江戸時代初期から中期を代表する名園の一つで、昭和20年の福井空襲により建造物は焼失したが、庭園はよく現在に伝えられていたため、昭和57年に国の名勝に指定、これを機に復原整備が進められ、平成5年に完成、一般公開された。建物の復原は一部分のみで、地元足羽山産の笏谷石を大棟に置いた柿茸の座敷と、茅葺の御台所・御台子から成っている。



御座ノ間



鎖ノ御間

見どころ

庭園や建物の専門家双方から絶賛されているのは、優れた水の造形と、庭と屋敷の見事な一体感。座敷の土縁のすぐ先に豊富な水が湛えられ、建具で切り取られた景色



↑ 楡形ノ御間 御月見ノ間↓

は四季折々の色を一枚の絵として映し出す。池の上に延びる楡形ノ御間は、花頭くずしの連窓から跳上げ戸越しに水面の光が掛込天井に反射し、まるで船に乗っているような気分になる。御月見ノ間は、西面いっぱいに出書院が配され、その上部には雲形に繰り抜いたケヤキの一枚板が入り、池に移る残月の眺めの額となっている。

建物の北側は御湯殿という殿様のお風呂が再現されている。当時は湯船につかるものではなく、サウナのような部屋があり、その手前には水勾配のついた板の間があり、そこで体を流していた様子がよくわかる。蒸気抜きの屋根など、建築的工夫を見ていると面白い。

南側の座敷は、細部にわたる材料や加工の質の高さが素晴らしい。欄間は、御座ノ間には桑の一枚板を透彫にしたもの、御次ノ間には山ウコギの皮付きの小枝を組んだもの、というように非常に手が込んでおり、どれをとってもこだわりの逸品である。なお、養浩館庭園はアメリカの庭園専門誌JOURNAL OF「日本庭園ランキング」で2008年より3年連続で第3位に選ばれている。



御湯殿



建物名称	養浩館 (旧御泉水屋敷)
建築年	1993年 (平成5年) 復原完成 (17世紀末期建築)
構造・様式	木造平屋建て・数寄屋造り
所在地	福井市宝永3丁目11-36
電話	福井市文化振興課 0776-20-5367 福井市郷土歴史博物館 0776-21-0489
H P	http://www.fukuisan.jp/ja/yokokan/index.html
開館時間	9:00~19:00 (3月1日~11月5日) 9:00~17:00 (11月6日~2月末日)
休園日	年末年始 (12月28日~1月4日)
アクセス	JR福井駅から徒歩約15分、駐車場有
備考	国指定名勝 養浩館庭園

旧京藤甚五郎家住宅

福井県南越前町

きゅうきょうどうじんごろうけいじゅうたく



正面

旧京藤甚五郎家住宅は、南越前町今庄地区の旧北陸街道沿いに建つ町家建築である。今庄は古来、官道として北陸街道が使われていた時代より京都から北国への玄関口として栄えた交通の要衝で、天保年間(1830～1844)には戸数290戸を数えたという当時の繁栄の面影を今なお留めている。伝統的な町家からなる今庄宿の町並みは、その多くが明治以降のものであると推定されているが、当家に残る文政元年(1818)の「火事見舞扣帳」により、当住宅はこの火災後の天保年間に建てられたものと考えられており江戸時代に遡る町家である。なお当家は、幕末に京都に向かう水戸浪士の一行が立ち寄ったとの伝承があることからわかるように、今庄有数の旧家でもある。

見どころ

【迫力ある佇まいを備えた外観と防火建築】

木造2階建、切妻造で、屋根には越前特有の赤瓦が葺かれている。間口は20m余りあり、標準的な町屋と比べると2倍の大きさである。両妻面の壁を屋根面よりも高く持ち上げた本格的なウダツ、防火建築を意識した土壁で塗籠められた虫籠窓や登り梁、垂木、さらに他の今庄町家と異なり板の庇ではなく瓦で葺かれた下屋庇から成る意匠により他の町家とは異彩を放ちひととき強い存在感がある。伝統的な町屋の形態をよく留めた、県内に現存する数少ない江戸時代の大型町屋である。



正面(南側外観)

【質実剛健で上質な内部】

柱や鴨居、長押など木部は漆で色付けされ、縁境の障子欄間は繊細で緻密な細工が施されている。決して派手ではないが意匠を凝らした上質な造作を各所にうかがう事ができる。



主屋1階座敷



主屋1階(オウエ)

主屋の内部は、焔のあったハイリクチ、ダイドコ(イロリノマ)とその奥に続くダイドコと並行して、前からミセノマ、オウエ、ナンドと並び、オウエには2階への階段もある。



主屋1階(囲炉裏の間)

ナンドと炊事場の間には3畳の小室、浴室、脱衣室、便所が設けてある。また、2階の道路側には洋室が存在するが、1階の水回りと合わせて、これらは明治～昭和にかけての改修によるものとされる。洋室の前室にあたる板の間は、京藤家の当主が嗜んだ、写真を現像する為に使用した暗室の役割も担っていたとのエピソードがある。座敷棟はオウエから続く一段と高くなったシキダイ、ナカノマ、ザシキ、さらに奥の縁側から成り、縁側には水戸浪士が付けたとされる刀傷が残り、歴史の情緒を味わう事もできる。

建物名称	旧京藤甚五郎家住宅
建築年	江戸時代後期から幕末
構造・様式	木造、二階建て
所在地	南条郡南越前町今庄
電話	南越前町教育委員会今庄事務所 0778-45-8003
開館時間	9:00～17:00(家の中を見る場合は要予約)
アクセス	JR今庄駅から徒歩5分/北陸自動車道今庄ICから車で10分
備考	福井県指定文化財 ボランティアガイド有 (要予約:今庄観光ボランティアガイド協会)



外観正面（三丁町通り北から）

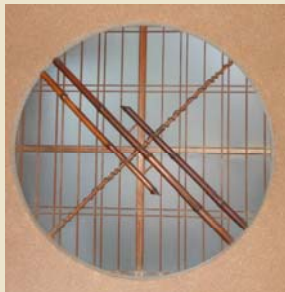
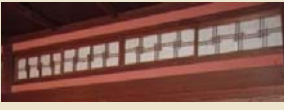
旧料亭蓬嶋楼は、小浜市香取地区にある三丁町と呼ばれる茶屋町に位置する。三丁町は、かつて西組・中組・東組に分かれていた小浜城の城下町のうち西組に属し、西組の町並みは、近隣の商家町や寺町を含め「小浜西組」の名称で国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、伝統ある町並みの保存と活用が進んでいる。紅殻格子の家々が軒を連ね芸妓の三味線の音が流れる情緒豊かな通りに、瀟洒な塀を巡らした蓬嶋楼は、三丁町でもっとも規模が大きく建物だけの間口は7間ほどある。十字紋を現した軒瓦を載せ腰板を貼った高塀を通りに面して構え、庇付きの引違い戸を建てて表玄関とし、中間に庇付きの出格子を設け、さらに庇付きで片引戸を建てて裏玄関としている。この表構えは秀逸で茶屋町の雰囲気の色濃くかもし出しており、恰好の被写体となっている。



2階主座敷主室

見どころ

料亭であったこの建物には、手の込んだ細工、繊細さと遊び心に富んだ意匠が随所に見られる。それらは目に楽しく、また、建築的視点からも必見の価値あり。



手の込んだ天井の細工



スクラッチタイルを貼って昭和初期のモダンな装いを演出している玄関廻り。



2階主座敷次の間

主座敷は2階の12帖半と10帖の続き間で、踏面が少し外側に湾曲した階段で3帖の前室に導かれる。主室は間口二間半のうち二間を床とし、左の一間を踏込床、右の一間を真塗り框の畳床として一間の付書院を備えている。床柱は下げ束とし、左方の半間に地袋を設け、上部の壁面は斜行させて壁いっぱい円窓をあけ奥の壁の一部を白く塗っている。こうすることによって客座からは円窓が三日月に見え、赤壁の華やいだ雰囲気座敷に仕掛けられた粋な趣向となっている。次の間を振り返ると、主室床の間と相対する壁面は中央で二分され、左に大円窓をあけて腰張りで波を表現し、上部にはシャレ木を横たえている。腰張りは床框に、シャレ木は落掛けに見立てられる。主座敷には三日月、次の間に満月を配し、遊びの意匠を演出している。

建物名称	旧料亭 蓬嶋楼
建築年	明治期
構造・様式	木造2階建て
所在地	小浜市小浜飛鳥64番地
電話	0770-64-6034(小浜市教育委員会文化課)
開館時間	10:00~16:00(土日祝日)
アクセス	舞鶴若狭自動車道 小浜ICより8分 JR小浜駅より徒歩17分
備考	小浜西組重要伝統的建造物群保存地区